

1 ジェイソン

この日、ジェイソンは電気ショックを受ける前から不運つづきだった。

目が覚めたらスクールバスのいちばんうしろの座席に座っていた。ここは？ 知らない女の子と手をつないでいる。これは不運じゃない。すごくかわいい子だ。だけど、だれだ？ 自分はここで何をしているんだ？ 背筋をのばし、目をこすって思い出そうとした。

バスには二、三十人の生徒が乗っている。みんな座席にもたれてアイポッドで音楽を聴いたり、しゃべったり、寝たりしている。全員歳は同じはずだから……十五歳、いや、十六歳？ ジェイソンはぞっとした。自分の歳がわからない。

バスはでこぼこ道を走っている。窓の外には青空とうねる砂漠がつづいている。こんなところに住んでいた記憶はない。けんめいに思い出そうとした……最後に覚えているのは……。

少女がぎゅっと手を握ってきた。「ジェイソン、どうしたの？」

少女は色あせたジーンズにウオーキングブーツとフリースのジャケット。チョコレート色の髪は無造作に切りそろえただけで、両側には細い三つ編み。顔はノーメイク。人目を引きたくないのかもしれないが、それは無理だ。かなりかわいい。瞳は万華鏡のよう——茶、青、緑と色が変わる。ジェイソンは少女の手を放した。「あの、なんか——」

バスのいちばん前で男の人が声をはりあげた。「いいか、よく聞け！」

体育の先生らしい。目深にかぶった野球帽の下からこつちをにらんでいる。薄くあごひげを生やし、苦虫をかみつぶしたような顔。腕も胸も筋肉むきむきでオレンジ色のポロシャツがはち切れそう。ジャージのズボンとナイキのスニーカーは真っ白。首からホイッスルをさげ、腰のベルトにメガホンをはさんでいる。身長が一メートル五十センチでなかったらけっこう怖い。先生が通路に立つと、生徒のひとりが大声でいった。「ヘッジ先生、座つてないで立ってー!」

「だれだ?」先生はバスの中をぐるっと見渡した。そしてジェイソンに気づき、さらに顔をしかめた。ジェイソンは背筋が寒くなった。すぐにもみんなの前で「おまえはだれだ、ここで何をしている?」とたずねられる——ジェイソンはどう返事をしたらいいかわからない。

ところがヘッジ先生はジェイソンから目をそらし、咳払いをした。「あと五分で到着だ! 事前

に決めたふたりひと組で行動すること。質問用紙を忘れずにな。諸君に限ってそんなことはないと思うが、問題を起こす者がいたら、学校までかつ飛ばしてやるからな」

ヘッジ先生は野球のバットを手にとり、ホームランを打つまねをした。

ジェイソンは野球のバットを見た。「あれが教師のいうこと?」

少女は肩をすくめていった。「いつものこと。うちの学校は『心をはぐくむ学校』だもの。『生徒は野獣だ!』でしょ」

少女はもう何度もくり返したジョークのような口ぶりだ。

「何かの間違いだ」ジェイソンはいった。「ぼくはこの学校の生徒じゃない」

前の座席の男子生徒がふりむき、大声で笑った。「だよな、ジェイソン。おれたち全員だまされんだ! おれは六回も逃げ出したことないし、パイパーもBMWを盗んだことはない」

少女の顔が赤くなる。「やめてよ、リオ。盗^{ぬす}んだんじゃないんだってば！」

「おっと、忘れてた。ディーラーに貸してって『たのんだ』だけだよな？」リオは（そんな話あると思うか？）といったげな顔でジェイソンを見た。

リオはラテンアメリカ出身のサンタのおともの妖精^{ようせい}のようだ。髪は黒い巻き毛で、耳は先がとがっていて、ベビーフェイス。いたずらっ子のような笑顔。こういう笑い方をする子のそばにマッチや先のとがった物は置かないほうがいい。器用そうな長い指は落ち着きがなく――座席をとんとんたたいたり、髪を耳にかけたり、アーミージャケットのボタンをいじったりしている。生まれつき異常に神経質なのか、水牛が心臓発作を起こしそうなくらいブドウ糖とカフェインを注射されたからだ。

「とにかく」リオがいった。「質問用紙は持つてるんだろ。おれ、自分のは何日か前にティッシュ代わりに使っちゃってさ。なんでそんな顔で見てんだよ。おれの顔にまたなんか描^かいてあるか？」

「君、だれ？」

リオは大げさに驚^{おどろ}いてみせた。「ばれたか。おれはおまえの親友じゃない。おまえの親友そっくりの悪者クローンだ」

「リオ・バルデス！」ヘッジ先生が前で叫^{さけ}んだ。「何をしゃべっている？」

リオはジェイソンにウィンクした。「見てな」そういつて前をむく。「すいません！ 声が聞きづらいんですけど。メガホンを使ってくれませんか？」

ヘッジ先生は小さくうなずいた。口実ができてうれしらしい。腰^{こし}のベルトからメガホンはずし、話をつづけた。しかし声はダースベーダーの声。生徒たちがどっと笑う。ヘッジ先生はまた話

しでした。ところが今度はかん高い声で「牛がモーモー！」という声が流れた。

生徒たちはげらげら笑っている。ヘッジ先生はメガホンをバンと鳴らした。「バルデス！」

パイパーは笑いをこらえている。「リオったら。どんな手を使ったの？」

リオは袖の中から小さなねじ回しをするりと出した。「おれ、天才だからさ」

「ふたりとも、ふざけるのはやめてくれ」ジェイソンはいった。「ぼくはどうしてここにいるんだ？」

このバスはどこに行くんだ？」

パイパーが眉をひそめた。「ジェイソン、それ冗談？」

「ちがう！ 本当にわからないんだ——」

「おもしろい冗談だな」リオがいう。「ゼリーにシェービングクリームをのせられた仕返しかな？」

ジェイソンはぽかんとリオを見た。

「ううん。本気みたい」パイパーがまた手を握ろうとしたが、ジェイソンは手を引っこめた。

「ごめん」とジェイソン。「まるでわけが——」

「ようし！」ヘッジ先生がまた声をあげた。「うしろの座席の連中が自主的に昼食の後片づけをし

てくれるそうだ！」

三人以外は全員大喜び。

「嘘だろ」リオがぼやく。

ところがパイパーはジェイソンを見つめたまま。シヨックと心配の中間の表情を浮かべている。

「頭をぶつけるか何かした？ 本当にあたしたちのことがわからないの？」

ジェイソンはこまりきった顔で肩をすくめた。「それどころか、自分がだれなのかもわからない」

バスは大きな赤い漆喰しっくいの建物の前で生徒をおろした。博物館らしいがまわりには何もない。「国立孤独博物館」ってとこかな、とジェイソンは思った。冷たい風が赤茶色の大地を吹ふいている。ついさっきまで自分の服装はほとんど気にしていなかったが、かなり寒い。ジーンズにスニーカー、紫むらさきのTシャツに薄手うすての黒のウインドブレーカー。それだけだ。

「じゃあ、記憶喪失者きおくそうしつやむけの集中講義を始めようか」リオがいった。同情したような話し方だが本気ではないだろう。「おれたちは『心をはぐくむ学校』、通称『ココハグ校』の生徒だ」——リオは校名を強調した。「つまり、おれたちは『不良』ってこと。家族や裁判所に問題児のレッテルを貼はられて、このすてきな牢獄ろうごく——おっと、失礼——ネバダ州アームピットにある全寮制ぜんりょうせいの『ココハグ校』にはうりこまれた。サボテンの林を一日十五キロ走ったり、デイジーを編んで帽子ぼうしを作ったり、大自然で生きる技術を学んでらっしゃい、ってな！ 特典として、野球バットをふりあげて生徒をおどすヘッジ先生と一緒いっしょに行く『課外学習』遠足つきだ！ これで全部思い出したか？」

「いや」ジェイソンはそつとほかの生徒たちを見た。男子が約二十人に、女子が約十人。だれひとり不良には見えない。ジェイソンは首をかしげた。いったい何をしたせいで非行少年少女専用の学校送りになったんだ？ なんで自分がこんな学校にいるんだ？

リオはあきれた顔をした。「いつまでそんな芝居しばいをつづけるつもりだ？ わかったよ。おれたち三人は今学期からつるんでる。いつも一緒だ。おまえはおれのいいなりで、デザートはくれるし、宿題はやってくれるし——」

「リオー！」パイパーがぴしやりといった。

「はいはい。最後の部分は嘘^{うそ}。けど、おれたちは仲間だ。いや、パイパーはおまえにとつては少しそれを越^こえてる。何週間か前から——」

「リオ、もういいい！」パイパーは真つ赤になった。ジェイソンも自分の顔が赤くなるのがわかった。パイパーみたいな女の子とつき合っていたら忘れるはずがないだろ、と思った。

「記憶喪失か何かなのよ」パイパーがいう。「だれかに相談しなくちゃ」

リオがからかうように笑った。「だれかつて、ヘッジ先生か？ 思い出させてやる、つて頭をバツトで殴^{なぐ}られるのがおちだ」

ヘッジ先生はいちばん前で大声で指示したり、ホイッスルを吹いたりしながら生徒を整列させている。ところが、ときどきジェイソンに目をやつては渋^{しぶ}い顔をする。

「リオ、だれかにジェイソンを診^みてもらわなくちゃ」パイパーは真剣^{しんけん}だ。「きっと脳震^{のうしん}とうか何か——」

「よお、パイパー」一行が博物館にむかつて歩きだすと、男子生徒がひとり、うしろにやってきた。リオをつき飛ばし、ジェイソンとパイパーのあいだに割りこむ。「ことなくず野郎^{やろう}と口をきくなよ。パイパーはおれとペアだろ？」

その男子生徒は黒い髪^{かみ}で、髪型はスパーマンそっくり。肌^{はだ}は浅黒く、歯は真つ白。「歯を直接見つめないでください。一生目が見えなくなるかもしれません」と注意書きをつけたほうがよさそうだ。服装はダラス・カウボーイズ（訳注…テキサス州ダラスに本拠^{ほんきょ}地を置くプロ・アメリカンフットボールチーム）のロゴ入りジャージに、ウエスタン風のジーンズとブーツ。この笑顔に世界中の不良少女はとりこさ、とでもいいたげな笑い方だ。ジェイソンは一瞬^{いつしゆん}でこの男子生徒が嫌い^{きら}になった。

「あっち行ってよ、ディラン」パイパーがいう。「勝手にペアにさせられただけなんだから」

「ほら、無理するなあって。今日はパイパーのラッキーデーだ！」ディランは勝手にパイパーと腕を組み、強引に引っぱって博物館の入口に入っていく。パイパーは最後に「110番して」というたげにふり返り、そのまま姿を消した。

リオが立ちあがり、服についた砂を払った。「あいつ、馬鹿じゃねえの」肘を曲げてみせる。私たちも一緒に腕を組んで中に入りましょう、とでもいうように。「おれ、ディラン。最高にかっこいい。自分とデートしたいけど、残念ながらそれは不可能だ。しかたがないから、君、おれとデートしない？　こんなラッキーなこと、めったにないよ！」

「リオって」ジェイソンはいった。「本当に口が悪いな」

「それ、おまえのいつものせりふ」リオはにっと笑った。「けどおまえがおれを覚えてないなら、こっちは使い古したジョークをまた片っ端から使える。さ、行くぞ！」

リオが親友だとしたら、ぼくの毎日はずっと平和からほど遠いはずだ。ジェイソンはそう思いながらリオと一緒に博物館に入った。

一行は博物館を見学してまわった。ときどきヘッジ先生がみんなをとめてメガホンを使って説明する。ところが、スターウォーズのシス卿のような声で話すか、いきなりかん高い声で「ブタがブー」といい出すかのどちらかだ。

リオはアーミージャケットのポケットからナットとボルトとパイプそうじ用ブラシを出して何か作っている。つねに手を動かしていないと落ち着かないらしい。

ジェイソンは頭の中がごちゃごちゃで見学に身が入らなかった。館内の資料はすべて、グラン
ドキャニオンと博物館の所有者であるワラパイ族に関するものだ。ワラパイ族はアメリカ先住民の
一部族だ。

数人の女子生徒がさつきからパイパーとディランを見てくすくす笑っている。おしゃれ好きな女
子のグループだ。みんな似たようなジーンズで上はピンク。ハロウィーンパーティーにも行けそ
うな厚化粧だ。

ひとりがいった。「ねえ、パイパーつてこの博物館の所有者と同じ部族なんでしょ？ 雨乞いの
踊りをしたらただ中を見学できるの？」

まわりの子たちが笑う。パイパーの見学パートナー、ディランも笑いをこらえている。パイパー
の両手はフリースの袖で隠れているが、中でこぶしを握っているはずだ。

「パパはチェロキー族」パイパーがいった。「ワラパイ族じゃない。ま、イザベルのこれっぽち
の脳細胞じゃ、ちがいがわからないでしょうけどね」

イザベルは大げさに驚いた顔をしてみせた。まるで厚化粧したフクロウだ。「あら、ごめんなさい！
ワラパイはママのほうだったっけ？ そっか。ママのことは知らないのよね」

パイパーはイザベルに食ってかかろうとした。ところが言い争いになる前にヘッジ先生が大声で
いった。「そこ、いいかげんにしないか！ 行儀よくしないとバットを出すぞ！」

一行は次の展示物に移動した。しかしおしゃれグループはやめようとしな

い。「居留地にもどってこれてうれしい？」ひとりがわざとらしく聞く。

「パパはお酒の飲みすぎで仕事ができないのよね」別の女子がいかにも気の毒そうにいう。「だか

ら泥棒どろぼうになったんでしょ」

パイパーは無視しているが、ジェイソンは殴りつけてやりたかった。パイパーのことは——いや、自分のことさえ覚えていないが、卑劣ひれつなやつらは許せない。

リオがジェイソンの腕うでをつかんだ。「落ち着け。パイパーはおれたちが加勢かぜしたって喜ばない。それにあのおしゃれグループがパイパーの父ちゃんの職業を知ったら、全員ひれ伏ふして『知らないかっ

つたんです。すいません！』っていうぜ」

「なんで？　パイパーのお父さんはなんなんだ？」
リオは信じられないというように笑った。「冗談じやうだんだろ？　本当に覚えてないのか。自分のガールフレンドの父ちゃんが——」

「だから、思い出したいよ。だけどパイパーのことだって覚えてないんだ。お父さんのことを覚えてい

るはずがない」
リオは口笛くふえを吹いた。「はいはい。寮りようにもどつたらゆつくり話そう」

ふたりは展示室の奥おくまで来た。大きなガラスドアから外に出られるようになってい

る。「さあ」ヘッジ先生がいう。「これからいよいよグランドキャニオン見学だ。くれぐれもグランドキャニオンを破損はそんしたりすることのないように。展望橋はジャンボジェット機七十台の重さに耐たえられる。したがって諸君のような軽量級は安心していい。ただ、仲間を突つき落としたりしないように。余計な書類作業はさせないでくれ」

ヘッジ先生がガラスドアを開け、全員外に出た。グランドキャニオンが目の前に広がっている。写真ではない本物のグランドキャニオンだ。崖がけから透とう明めいなガラスでできたU字形の展望橋が張り出

している。谷底までまる見えた。

「げっ」リオがいう。「すげえ迫力」
はくりよく

ジェイソンもうなずいた。記憶はなくしているし、仲間に見覚えもないけれど、グランドキャニオンには感動した。

グランドキャニオンは写真で見るとはるかに大きい。展望橋は高い位置にあるため、鳥は下を飛んでいる。百五十メートル下の谷底を川が蛇行して流れている。一行が館内にいるあいだにせりあがってきた嵐雲が、そそり立つ岩肌に怒った顔のような影を落としている。いたるところに赤茶色と灰色の峽谷が走っている。まるでどこかの狂った神がナイフで切りつけたかのようだ。

ジェイソンは頭の奥がずきんとした。「狂った神……」なぜそんなこと思ったのだろうか？ 何か大きなことを思い出しかけた気がする——忘れてはいけない何かを。それだけではない。ジェイソンは身の危険を感じた。

「だいじょうぶか？」リオが聞いた。「谷底にむかって吐くつもりか？ だったらカメラ持つてくれればよかった」

ジェイソンは手すりをつかんだ。体が震え、冷や汗がにじむ。高所恐怖症だからではない。ジェイソンは目をしばたいた。すると、頭の奥の痛みが引いた。

「だいじょうぶ」ジェイソンはいった。「頭が痛いだけだ」

頭上で雷が轟いた。ジェイソンは冷たい風にあおられ、よろけそうになった。

「変だな」リオが黒い雲を見あげて顔をしかめた。「真上は真っ暗だけど、ほかはぜんぜん平気だ。おかしくないか？」

ジェイソンは空を見あげた。本当だ。展望橋の上空に黒々とした雲が集まっている。しかしまわりはどこも晴れ渡っている。いやな予感がする。

「いいか、諸君！」ヘッジ先生も黒雲を見て心配そうに顔をしかめている。「いそいだほうがいい。さつそくお勉強開始だ！前にいったように、的確な言葉で書くように！」

嵐雲がごろごろ音を立てる。ジェイソンはまた頭が痛くなってきた。無意識にジーンズのポケットに手を入れ、硬貨を一枚取り出す——金貨だ。五十セント硬貨くらいの大きさだが、それより厚くて表面はでこぼこしている。片面には戦斧の図柄。もう片面は月桂冠をかぶった男の顔だ。『IVLVS（訳注：「ユリウス」のローマ字大文字表記）と刻印されている。

「おい、それ本物の金貨？」リオがいう。「どこに隠してたんだよ」

ジェイソンはポケットに金貨をしまった。なぜこんなものを持っているのだろうか。今にこれが必要になる、そう思ったのはどうしてだろう？

「なんでもない」ジェイソンはいった。「ただの硬貨だ」

リオは肩をすくめた。リオの頭も手と同じでつねに活発に動いているにちがいない。「行くぞ。展望橋から下につばを吐けるかやってみな」

ジェイソンもリオも質問用紙なんてどうでもよかった。理由のひとつは、ジェイソンは嵐が気になつてしかたがなかったし、頭の中がごちゃごちゃだったから。さらにもうひとつ。「グランドキヤニオンの地層を形成する堆積岩を三つあげなさい」とか「侵食の例をふたつあげなさい」と聞かれてもこたえようがない。

リオはまったく役立たず。パイプそうじ用ブラシでヘリコプターを作るのに夢中だ。

「見てな」リオは完成したヘリコプターを飛ばした。すぐに墜落ついうくするだろうと思ったのに、細長いブラシで作ったプロペラは見事に回転している。小さなヘリコプターは反対の岩壁がんべきまで半分くらい飛んだところでバランスをくずし、くるくるまわりながら谷底に落ちていった。

「よくあんなの作れるな」ジェイソンはいった。

リオが肩をすくめる。「輪ゴムがあつたらもつといいやつが作れたのにな」

「もう一回聞くけど、ぼくら本当に友だちなのか？」

「聞くまでもない」

「本当か？ 最初に会ったのはいつだ？ そのとき何を話した？」

「あれは……」リオは顔をしかめた。「よく覚えてない。おれ、ADHD（ちゅういけつかんたれうせいしやう 注意欠陥多動性障害）だし。くわしく思い出せっていったって無理」

「だけどぼくはリオのことをぜんぜん知らない。まわりのだれも知らない。もしかりに——」

「ジェイソンのいうとおりで、まわりが全員勘違いかんちがひしてるとしたら、か？ ジェイソンは今朝いきなり現れたのに、みんなはジェイソンがずっと前から一緒いっしょにいると思ってるとしたら？」

ジェイソンの頭のどこかで声がささやく。〈そうだ、そのとおりだ〉

そんなのありえない。クラスの全員がジェイソンとふつうに接している。ジェイソンをクラスの一員として扱あつかっている——けど、ヘッジ先生だけは別だ。

「これ、持ってきてくれ」ジェイソンはリオに質問用紙を渡した。「すぐにもどる」

リオは何かいいたそうだったが、ジェイソンは展望橋をすたすた歩きだした。

展望橋にいるのは生徒たちだけだ。観光客には時間が早すぎるのかもしれない。でなければ嵐が近づいているせいかも。ココハグ校の生徒たちはふたりひと組で展望橋のあちこちに散らばっている。大部分はふざけたり、しゃべったりしている。手すりから一セント硬貨を下に落としている生徒もいる。十五、六メートル先でパイパーが質問用紙に何か書きこもうとしている。ところが、ばかデイルンが、片手をパイパーの肩にかけ、ぴかぴかの白い歯を見せてほほ笑みながらつきまとっている。パイパーは迷惑そうだ。ジェイソンに気づき、「こいつ、絞め殺しちゃつてよ」と目で訴えた。

ジェイソンは「ちょっと待ってて」と合図し、ヘッジ先生がいるところまで歩いていった。ヘッジ先生はバットにもたれて黒雲を見つめている。

「君の仕業か？」ヘッジ先生がジェイソンにいった。

ジェイソンは思わずあどさつた。「何のことです？」先生は雷鳴をジェイソンのせいに行っているようだ。

ヘッジ先生は野球帽の下から、小さな丸い目を光らせてジェイソンをにらんでいる。「ごまかそうとしてもむだだ。ここで何をしている。なぜ私の仕事のじゃまをする？」

「てことは……ぼくのこと知らない、そうですね？ ぼくはこの学校の生徒じゃないんですね？」

ヘッジ先生はからかうように笑った。「今日が初対面だ」

ジェイソンはうれしくて泣きそうになった。少なくとも頭がおかしくなったわけじゃない。何かの間違いでここにいらしい。「自分がどうやってここに来たのかわからないんです。目が覚めた

らスクールバスに乗っていた。わかっているのは、ぜんぜん知らない場所にいるってことだけなんです」

「そうか」ヘッジ先生はしわがれ声をひそめた。内緒話ないしょばなしでもするように。「君がかけたミストは強力だ。クラスの全員に自分が昔からのクラスメートだと思わせた。しかし、私はだまされない。ここ数日、怪物かいぶつのにおいがしている。侵入者しんにゅうしやがいるのはわかつていたが、君は怪物ではない。ハーフのにおいがするからな。では——君は何者だ？ どこから来た？」

ヘッジ先生の話はちんぷんかんぷんだ。ジェイソンは正直にこたえることにした。「自分がだれなのかわかりません。記憶きおくがないんです。助けてください」

ヘッジ先生はジェイソンの顔を見つめている。頭の中を読みとろうとするかのようだ。

「なるほど」ヘッジ先生がつぶやくようにいった。「君は嘘うそはいっていない」

「もちろんです！ それより、怪物とかハーフとか、いったいなんの話です？ 暗号か何かですか？」

ヘッジ先生はさぐるような目をむけている。ジェイソンはこの先生は頭がおかしいのかもしれないと思う反面、そうでないこともわかつていた。

「いいか」ヘッジ先生がいう。「私は君がだれなのか知らない。わかっているのは君が『何者なのか』ということだけ。それが問題なんだ。今やふたりどころか三人を守らなくてはならなくなった。君は特例か？ そうなのか？」

「なんの話ですか？」

ヘッジ先生は嵐雲に目をやった。展望橋上空をおおう黒い雲はいつそう濃く、厚くなっていく。

「今朝、訓練所から連絡れんらくがあつた。保護チームがこちらにむかっているという話だつた。特例を保護するためとのことだつたが、詳しくは教くわえてもらえなかつた。『まあ、いいだろう』と私は思った。今私が見張みはりっている二名はかなりの力があり、通常より年齢ねんれいが高い。バスの中で怪物かいぶつのにおいがした。つまり、ふたりとも追おわれている。だから訓練所は急遽きゅうきょこの二名を保護するつもりなのだろうと思つた。ところが、そこに突然とつぜん君が姿を現した。ということは、君が特例か？」

ジェイソンはさらに頭ががんがんしてきた。ヘーフ。訓練所。怪物。なんの話かさっぱりわからない。しかしその言葉を聞いてジェイソンの脳はフリーズした——突然消えてしまったサイトにアクセスしようとしているかのようだ。

思わずよろけそうになつたジェイソンをヘッジ先生が支えた。ヘッジ先生は背は低いが手の力は強い。「まあ、落ち着きけ。記憶きおくがない、そういつたな？ いいだろう。保護チームがここに到着とうちやくするまで、君にも目を配くわつておく。この問題は所長に預けることにしよう」

「所長つて？ なんの訓練所ですか？」

「まあ、座いすつて休め。まもなく援軍えんぐんがやつてくる。それまでに何も起きなければいいが——」

上空で稲妻いなずまが光つた。風が急に強くなる。質問用紙が飛ばされ、谷間に落ちていく。展望橋全体が揺れた。生徒はみんな転びそうになり、手すりにつかまって悲鳴をあげた。

「不安の中だ」ヘッジ先生ははやき、口にメガホンをあてた。「全員、中に！ 牛がモー！ 展望橋から離はなれろ！」

「この展望橋は安全だつていったじゃないですか！」ジェイソンは風に負けないよう声をはりあげた。

「通常ならな」ヘッジ先生がうなずく。「状況じょうきようが変わった。さあ、いそげ！」